

「貯徳旦那道」から学ぶ 生き方と投資のあり方

日本一の個人投資家、竹田和平さん。百社以上の上場企業の大株主になっている方だ。今回、澤上さんのご紹介で面会がなかった。小雨降るなか、壮大にしてすっきりと心持ちよい竹田本社にお邪魔する。「どんな方だろう、どんな対談ができるだろう」。緊張感とワクワク感を交えて門をくぐる。館へ足を踏み入れると、職員の方々とともに竹田和平さんが温かい握手でのお出迎え。作務衣姿の氏の温かいオーラに包まれつつ、対談は始まった。



【竹田和平氏プロフィール】

▶1933年、名古屋で菓子業を営む大家族の一員として生まれる。幼児期は念仏信者の祖母の影響を受け、少年期には農業に参加するなど戦中戦後の厳しい変動を体験。青年期に菓子事業で「タケダのポーロ」「麦ふぁ〜」を発表し、壮年期には「わくわくボウル」「お菓子の城」を。そして百尊家宝、株式投資など事業家として活躍する。

人のため、将来のために お役に立つのが「投資」の姿

岡本 現在、澤上さんなどとともに日本に本格的な長期投資家をたくさん増やそうと、クラブ・インベストライフという活動を行っています。

個人投資家が経済的に自立し

て、さらに良いことのためにどんどんおカネを使い、そして豊かで幸せな人生を送ってもらいたい。そんなことの手助けができればと思っています。

竹田 それは、ある意味、私がやろうとしていることと同じです。私はいま、「貯徳旦那道」というのを提唱しています。

投資家というのは経済自由人ですよね。自立している。そういう人が幸せになる。そして発展していく。私はそれを問答という形でやっています。みんなで意見を出し合って議論をしていく。私が一週間に一回、「貯徳旦那道とは如何？」^{いかに}というような題を出します。

実は、岡本さんの『瞑想でつかむ投資の成功法』という本を読ませていただきました。瞑想と投資というのは初めて聞いた言葉でしたが、それを読むと、私の目指しているところと同じだなと思いました。やはり、日本は徳のレベルを上げないといけない。モノばかり持っていて心が伴わないと、いつか破壊が起こってしまう。

岡本 物心一如という言葉がある

ように、モノに心を込めることが大切なのではないのでしょうか。また、おカネも心が一緒について回っているものです。貯徳というのは素晴らしい言葉ですね。

竹田 「器」ということがあります。器に水をもっと入れたければ器を大きくしなければならぬ。今生の人生とは、来世の人生を送るために器を大きくすることです。また、「天知る、地知る、我も知る」ともいいます。悪いことをすれば、それを一番わかっているのは自分であると。

昔はこういうことが普通にいわれていました。それが代々、伝えられて良い作用をしていた。今は核家族になったので、その伝承ができなくなっている。みんな、今の人生がすべてだと思っている。来世も過去世もないと思っている。だから物事の見方が短視的になり、今さえよければいいと思っている。物理的にはそれでよくても、精神的にはみんな不安になっている。本当は、人間はどんなときも希望がなければ生きていけないのですよ。

岡本 その通りですね。



竹田 私は20数年前から日本の歴史上の偉人を百尊として勉強してきました。それから自分が少しずつ方向転換してきたように思います。百尊を思うということも瞑想的なところがあります。

岡本 自分自身の枠をどれぐらい広げられるか、自分の時空をどれぐらい拡大できるかということですね。ですから、歴史上の人物に思いをはせると自分の枠も広がるのでしょうか。

竹田 モノが充足してきたらそれしかない。

岡本 人のため、将来のためになることをするというのは、まさに投資ですね。

「貯徳問答講」と「ありがとう」

竹田 そうです。短期的には感謝という形で返ってくる。これはおカネに替えがたい喜びです。

また、長期的に見てもすごく大

きな投資です。長期的なリターンは自分のところにくるのではなく、社会に還元される。教育などは良い例です。

私のやっている「貯徳問答講」というのは、徳を蓄えましょうというものです。それを問答の形でやるんです。

また、3年前から「ありがとう百万遍」という運動も実践しています。毎年、「ありがとう」を百万回唱える。これも瞑想と似ている。大自然のすべてに感謝する。空気があるから生きていられる。緑があるから、太陽があるから存在できる。こういう具合にすべてに「ありがとう」、「ありがとう」と感謝しまくろう。そうすることで自分自身を脱皮できる。

岡本 「ありがとう」と言うと相手が喜ぶ。相手が喜ぶと自分がうれしい。自分が喜ぶと、相手もまた喜ぶ。

竹田 そう。瞑想の目的である「天とつながる」という感じが、「ありがとう」を唱えていると出てく

るんですよ。天とつながって「天命」ということを感じる。「これ天命だよ、これすごいよ、ワクワクだよ」と言いたくなる。ありがたいで自我を解放させているんでしょうね。解放することで、代わりに天が入ってくる。

岡本さんの本に「小さい意識は大きい意識に支配される」ということが書いてありましたが、まさにそういうことなんだなと思いました。大きい意識を持って何かをするとみんなが参加してくる。意識が小さいとみんな参加してこない。

岡本 そうですね。

竹田 私は今、貯徳問答に講生という立場で参加していますが、問答を始めて1カ月ぐらいで参加している方が変わってきますね。運氣が上昇する、困難が解消する、そういうことが起こり出す。結局、困難は自分が引き寄せている。それを手放すと消える。そういうことが1カ月ぐらいでわかってくるんですね。

岡本 みんな、人は良いことがあったからいい顔をしていると思っている。しかし、本当はいい顔をしているから良いことが寄ってくる。

竹田 そう、そう。笑顔とありがとうができたら運は開けてきますね。グンとよくなる。まず、自分がありがとうと言うと、人さまが笑顔になる。そうすると自分も笑顔になる。笑顔になると何でもコミュニケーションできるようになる。そうすると楽しい。楽しいということは運が良くなるということですからね。みんな、楽しい人生が目標ですからね。

岡本 いやー、本当にそうですね

ね。人生の目的は“しあわせ持ち”になることで、お金持ちになることではない。お金持ちになるのはその一つの過程ですからね。

竹田 しあわせ持ち、それですね。おカネを稼ぐのは手段ですからね。おカネはとても便利な手段ですから。

日本は、500~600年前にはそれほどおカネは流通していなかった。では、そのころの人は不幸せだったかというところでもない。おカネができてモノは豊かになったけど、幸せになったかというところ、これまたそうでもない。結局、おカネは、幸せという観点からいけば中立なのかもしれない。ヘタをすると、おカネがあることによって変な支配関係ができたりする。幸せ感を封鎖してしまうことがある。おカネは使う人によってきれいにも汚くもなりますね。

岡本 しかし、一般におカネのイメージは汚い、お金持ちのイメージは悪い人ですね。

竹田 どうしてそういう否定的なイメージなのでしょうね？

岡本 一つは日本の伝統的な考え方として「武士は食わねど高楊枝」とか、「清貧」という考え方があるからでしょうか。貧しくても清い人はいるでしょうが、でも、貧しければみな清いかというところとはいえない。

竹田 そう、貧しいと借金をしたりして、大変な人も多いかもしれない。

岡本 それから、テレビでよくある企業トップのお詫び会見。企業の不祥事は、だいたいおカネに関連したものが多いですよね。そうやって悪いイメージが作られてい

るのではないのでしょうか。これはマスコミの問題かもしれない。

世界を豊かにする第一歩は、おカネと友達になること

竹田 そうですね。それは日本の損失ですよね。まだまだ、貧困のところがたくさんあるから、資本主義の力で世界を豊かにしていかなければいけない。

いずれはボランティア天国になるのですが、それまでは、やはり資本主義が続かざるを得ない。それなのに、おカネを嫌ったら、おカネにも嫌われてしまう。何でも嫌ったら嫌われるし、愛せば愛される。

岡本 おカネと友達になればいい。

竹田 あっ、はっ、は。「友達になる」はいいですね。何でも味方にしてしまえばいい。おカネは敵に回すとやっかいだから。

岡本 誰かと友達になりたかったら、その人に興味を持つ。だから、おカネと友達になるにはおカネに興味を持たなければならない。

竹田 人生は人間関係で幸せにも不幸せにもなる。同時におカネとも友達にならないといけない。おカネがないだけで信用がなくなったりするのは悲しいからね。

岡本 やはり、おカネに心を込めるといえる必要があるということですね。

竹田 私は貯蓄問答講で「まごころ」ということをよく言います。まごころというのは天から分かれてできていて、誰でも生きている以上は持っているもの。

「自分」というけど、「自」は「自然」の「自」、それが「分かれた」

ものが自分。自然から分れたということは、われわれはみな自然、天と同質だということです。そこに重要なポイントがあるんだよ、とよく言っています。

自分のなかに天が入っている。天と自分とは同じ。ただ、役割を持って生きている。お釈迦様が「天上天下唯我独存」とおっしゃったけど、それはこの世でもあの世でも俺は俺だという意味ではないかと思うんです。だから「独尊」ではなく「独存」だと思うのです。自分以外に責任を取る人はいない。そこに気づくとまさにこの世は適材適所で、みんなが素晴らしい人生を送れる極楽になる。まあ、それまでにはまだ時間がかかるでしょうけれど。

岡本 われわれ、ひとり一人の人間はたくさんの細胞でできています。その細胞の一つずつはちゃんと知性を持って、適材適所で役割を果たしている。

宇宙という大きな生命体のなかで、人間は一つの細胞です。そこでひとり一人の人間が適材適所でどのような役割を与えられているのかを自覚し、それを果たすことが使命なんでしょうね。

竹田 一人しかいない人間として、どのように役割を果たし、自分の器を大きくしていくか。

自分の器が大きくなるということは天の器が大きくなることです。天命を受けてこの世に生まれているのだから、それに対してお返しをしなければならぬ。命の源にご報恩しなければならぬ。

類の法則で人間は人間のなかだけで成長している、猿は猿、竹は竹で成長している。役割として自

分の類をどのように発展させるかという課題があります。人間でいえば、いかに人類を進化させるかということ。それが人間に課された天命。天命を果たすときはうれしい。天が喜びというご褒美をくれる。逆に天命に反することをするとときには苦しい。

岡本 われわれのなかにある天からの声の受信機がしっかりしていないといけません。どのようにしたら感度がよくなるのでしょうか。

竹田 瞑想も、ありがとう百万遍もそうでしょう。美しい言葉に出合う、美しい心の友達、美しい環境、とにかく美しいものに囲まれる。類の法則で美しいものには美しいものが集まる。連日、私のところにも素晴らしい方がお見えになってくださる。不特定多数の人に働きかけて、経営で成功したり、ブログで成功したりする人はやはりバランスがとれている。インターネットの普及で、それがどんどん加速していますね。

岡本 人間の意識の拡大にインターネットは大きな役割を果たしていますね。

竹田 これはもう、革命ですよ。産業革命以来の革命です。産業革命はモノの革命、インターネットは心の革命です。私はインターネットのことを「まごころルート」と呼んでいます。

岡本 おカネと一緒に悪い使い方もあるけれど、良い使い方をすれば無限の可能性がある。

竹田 貯徳問答講のブログをお見せしましょうか？（ブログのプリントアウトを見ながら）これは60代の女性の方で、会社経営をしておられた。それを後進に譲られて、

「さあ、これから30年、何をしようか」と模索しているときに私の問答講に入られました。このような講生さんに対するメッセージを講師が書くのです。

現在、39講あり、それぞれ講生さんが24～25名います。この北海道の講師さんはたいへん活躍されている方で、なにしろメール数が2000以上ある。ということは、講生がそれを読んでいるということです。いいことを読んでいると、みんなピカピカになってしまうんですよ。また、それに対して返答をするでしょ。そうするといい言葉を出そうとしますよね。それが終わるとアンケート調査をする。

岡本 学期があるのですか？

竹田 2カ月間です。終わったらまた次の期も入れるんですよ。アンケートも非常に好意的で前向きなものが多いです。「役に立った」というのが99%もある。否定的な回答は1%程度でした。このアンケート結果を今日、全講生にメルマガを出したところです。

岡本 ここに参加されている方は必ずしも投資をしている方とは限らないのですか？

竹田 違います。自分の人生をどのように豊かで楽しくするかということを考えている人々です。投資家もいます。それから経営者。経営者を目指す人が多いですね。自立している人、今から自立したい人。定年を迎えた人。

岡本 やはり、定年を迎えて急にどうするか考えるより、それより前から自分の人生を考えておく必要があるのでしょうかね。

竹田 そうですよ。世の中、どのように変わってきているかなどを

考えておかないと。勤めていたときと同じように世の中が動くと思っていると困ってしまう。あっちにぶつかり、こっちにぶつかりしてしまう。

岡本 私どものインベストライフの活動は、まさにインベストメントとライフを考える会です。豊かで幸せな人生を送るために、どのように生きたらよいのか。そのなかで金融資産への投資をどう考えるか、長期投資のあり方、正しい資産運用の方法などの啓蒙活動をしています。

日本各地に自主的な勉強団体、「サロン・インベストライフ」が設立されて、みんなが集まって意見の交換会をしています。貯徳講とも少し似たところがありますね。

竹田 そう、精神的な投資も大切だけど、経済的基盤も重要ですからね。ビジネスでもがんばっている人がたくさんいます。そういう人は目がきらきらしている。たとえば「君は赤ちゃんが大きくなったような人だなあ」などと言います。その彼の話を聞くとおじいちゃんにすごく憧れている。「おじいちゃんの生き方、最高！」と思っている。

岡本 そういう憧れの対象があるということは重要ですよ。逆に言えば、ある程度の年になったら、次の世代に生きざまを見せてあげることが必要ですね。

竹田 そうですね。気概ということが必要です。

塩野七生さんが書いていましたが、ローマ帝国を作ったシーザーという人は、彼のなかに歴史が凝結したような人だそうです。そう

いう人にみんなが吸い寄せられる。「知力、説得力、肉体耐久力、持続意思、自己制御がリーダーの資質である。国家の繁栄は個人のリーダーシップと気概である。

「歴史は時に一人の人物のなかに歴史を凝縮し、この人物の指し示した方向に向かうことを好む」と、述べておられる。シーザーは「多くの人は見たいと欲することしか見ない」と言っている。彼は部下が自分で思っていたこと以上のことまでやらせてしまう人だった。「えー、私ってこんなにできるの?」と思わせることのできる人だった。

岡本 そういう憧れることのできる傑出した人物を目標として持つことは大切ですね。歴史上の人物でもいい。あんな人になりたい、という人物に出会えるのは素晴らしいことです。両親や先祖は言うに及ばず、歴史上の人物も今の自分の人格形成に影響を持っている。それを純化して、次の世代につないでいくのがわれわれの使命なのでしょうね。

竹田 私は50歳になった誕生日に離れの部屋に一日こもり、庭を見ながら過去を振り返り、これからのことを考えていました。ずーっと、過去を遡^{さかのぼ}ってみたんですよ。自分が生まれてきたのは両親がいたからだ、その両親はどのように出会ったか、ずっと考えていた。

そのときにね、どのようにしてそうなったのかはわからないのだけれど、たまたま懐かしい存在が現れたんです。これはまさに自由自在、融通無礙^{むいげ}の存在。とにかく、たまたま、懐かしい存在。こんな懐かしいものがあつたん

だ、これはたとえようがないなと思った。あえて言えば、小さいときに迷子になって、やっとお母さんが見つかったような……。形はない。もやっとしている。でもそういう存在があるのを感じて、神様や仏様はこういうところから出ているのかなと思いましたね。

岡本 それは素晴らしい体験をされましたね。お話をお伺いして、白隠^{はくいん}禪師の「闇の世に鳴かぬカラスの声聞けば 生まるる先の父ぞ恋しき」という句を思い出しました。

竹田 それからいろいろなことがわかってきたんですよ。たとえば、葬式^{まうし}のとき、「帰命無量寿如来」と書いてあるでしょう。「ああ、あの永遠の世界に帰ることなんだ。それが向こうから来る、如来、来るが如しだから、やって来るんだ」と。それは不可思議。考えたってわからない。

この懐かしい存在は光のようなんだけど、ピカーッと光るのではない。モヤッとしているけれど懐かしくてたまらない。びっくりするほど感動しましてね、また仏壇の前などでありがとを唱えていると「ありがとう、ありがとう」が、こだまして跳ね返ってくるんですよ。気持ちがいいんだね。

人々の不安な心が市場や世界に及ぼす影響

岡本 ありがとうございますに囲まれるというわけですね。

ところで、話題を変えて少し、株式市場の話をお聞かせください。株式市場というのは参加者の心象が即座に反映されるものです

よね。それを考えると、現在の市場参加者の心理をどのようにご覧になっていますか?

竹田 みんな不安になっているよね。大恐慌という言葉がありますね。これは「大きく恐れ慌てる」という字でできている言葉です。

今から80年ぐらい前に大恐慌がありましたよね。大恐慌はみんなが恐れるから起こる。前の大戦争も投資家から発したようなところがあります。ニューヨーク株が大暴落して投資家が不安になった。その不安が拡大して金融機関にまで及んだ。その結果、事業活動もダメになり大失業時代がきた。

株が下がっているうちはバーチャルな世界だからたいしたことないけれど、失業となるとリアルな世界になり、人権問題なども関係してくる。食べていけなくなる。そして、政府がカネを出しだすと全体主義への道を歩むことになってしまう。たまたまなくなって戦争への流れができてしまう。マスコミがそれを煽^{あお}る。

岡本 なるほどそうですね。

竹田 国内であの饅頭屋^{まんじゅう}が悪い、あのパン屋が悪いと言っているうちはまだいいが、最近、食の安全の問題で中国に非難が向かっているでしょう。中国製品を買わなくなる。反中感情が出てくる。そうすれば反日感情がでてくる。あれだけ中国に配慮していたマスコミまで、中国批判をしている。おかしいと思うよ、これ。ころっと変わるんだから。

岡本 そういう感情の世界、バーチャルなものがだんだんリアルな世界に影響を持つようになってくる。

竹田 マスコミがある意味、グ

ローバル化を恐れている。マスコミは自由を守るものだと言われてきたが、それは基本的に一国内の、昔は絶対君主で今は官に対する自由が対象。これがね、官にべったりになって、それも弱者に対して統制しようという動きになっている。

マスコミにとっては、グローバル化は都合が悪い。前の戦争のときは、その流れを知識階級が止められなかった。今、このような流れを止めるには、人々が経済的に自由になること。経済的に自由でなければモノがいえない。だから、インベストライフの活動も重要なんです。投資家が自由を守らなければならない。

岡本 本当ですね。インベストライフの存在意義ですね。官やマスコミの暴走を止めるためにも、自立した投資家がたくさん必要だということですね。

竹田 織田信長が命をかけて作り上げた楽市、楽座という自由市場経済。

岡本 あれこそフリー、フェア、グローバル。当時は日本全体がグローバルだった。

竹田 そうそう。秀吉が見事に完成したが、歳を取ると官僚化してしまった。千利休は自由都市の堺の旦那だった。その堺が奉行に乗っ取られてしまった。それに対する腹立ちが恐ろしい辞世の句に残っている。自分たちに任せてもらえば繁栄してみんな喜ぶのに、なぜ、官僚が統制しなければならないのかという怒りがあった。

関ヶ原の戦いは、官僚統制か、地方分権かの戦いだった。結局、徳川の地方分権が勝った。そして、地方文化が花咲き、太平の時代が

続いた。幕末になり産業革命の波が日本にまで及んできた。植民地化を避けるために中央集権国家の時代になった。そして、大戦争につながった。

岡本 人類が発生してからずっと活動範囲と意識の拡大が続いてきています。それを今、グローバル化と呼んでいるわけですが、これは逆戻りしないトレンドです。そのなかでいかに日本の文化を守り、他国の良さを認識していくかということが必要とされているのでしょね。

竹田 良い意味での内向きは必要でしょね。何でも海外のものが良いのではなく、日本の文化を育てなければならぬ。

岡本 グローバル化するほど自分の国の良さを理解する必要がある。

竹田 日本の良さがわかると、ほかの国の良さもわかるようになる。

岡本 そのような美学を持った投資家をもっともっと欲しいですね。

理想とする個人投資家の姿とは

竹田 私もかつて、あまり何も考えずに大企業に投資をしていました。山一が倒産したころね。あの事件が起こって、いったい、天は自分に何のメッセージを送っているのかと考えましたね。結果として、投資家は利益だけで投資するのではなく、目覚めなければならぬと気づいた。これは株主になって相手の会社を励ませということだと思ったのです。そこで、大きい会社ではなく、小さい会社に投資をしてその会社を励まして、これは天命なのだと思います

たね。

それ以来、訪問してこられる投資先企業の方を励まし、配当金を受け取るたびに、「徳を配っていただいております」というメッセージを送ったりしているのです。良いところをどんどん褒めて元気になってもらう。悪いところは謙虚に考えてもらう。そんなことをしています。まだ、天との約束を果たすところまではいっていませんが。

岡本 一般の個人投資家は、小さい企業でもなかなか大株主にはなれない。しかし、大株主のような気持ちを持って経営者を励ますつもりで投資すればよい。

竹田 それでね、小さい投資家は小さいなりに大事な財産でしょうから、投資先企業に手紙の一本も書く。「私はあなたの会社のこれこれの商品が好きです。それで株主になりました。どうか、良い点をもっと伸ばしてください」と手紙を書く。そうしたら経営者も変わりますよ。

岡本 そういう手紙がたくさんくるようになったら、それはすごい勇気づけになるでしょう。経営者が励まされる。

竹田 気持ちが大きくなる。だいたい、失敗するのは気持ちが小さくなったときです。ますます、安定しようとして悪い方に行ってしまう。世の中の変化は必然なんだから。安定しようと思うところに間違いがある。

岡本 個人投資家がそのような手紙を書くと、自分自身、その企業の何が好きで株主になっているのかを考えてみる、良いきっかけになりますね。多くの人が株価だけ

を見て売り買いしている。しかし、小さくても自分なりの声を出していけたらいいですね。

竹田 いろいろなやり方があるいいのでしょうか。みんな学びだから、子どもが転んで学んでいくようなもの。痛さがわかりますからね。

私もいろいろと投資で学ばせてもらった。皆さんも学ばせてもらえばいい。いくら説明しても、やってみなければわからない。転んでみなければ痛さはわからない。それで育っていく。だから、私は投機をしている人もそれでいいと思っています。そんなことはちゃんと天が注意してくれる。天から信号がくる。

岡本 投資というのは奥深いものですね。人生を考えることにもつながる。

竹田 株式投資というのは、幅広い投資のひとつの窓口でしかありません。たとえば、子どもを育てるのだって投資。みんな何らかの形で将来のため、未来のため、来世のために投資をしている。その一つが株式投資でしょう。

私も会社を経営してきて、常に投資の歴史でしたよ。常に土地を求め、工場を求め、設備を求め、これみんなおカネを払ってやってきた。そのときに、その土地などがいくらで売れるかなどと考えたことはなかった。こうして、こうすれば商品がこれだけできて、利益がこれぐらいになる。利益の出る過程で社員が喜び、得意さんが喜び、消費者が喜び。みんな喜んでくれて楽しい。それで投資をしてきた。それは自分に対する投資ですよ。

岡本 そうですね。

竹田 自分の能力に対する投資です。しかし、健康上の問題などで自分がそれに適応できなくなったら、人に対する投資になる。従業員を信頼して仕事をしてもらう。さらにマーケットを信頼して投資先企業に仕事をしてもらう。決算資料がきちんと提出され、証券市場は比較的安全です。配当金もみんなに公平に払ってくれる。

岡本 しかも、世界中、どこでも自分のおカネを働きに出すことができる。

竹田 そうなんです。世界のいろいろな国の発展を助けることができる。中国の大繁栄も、世界のおカネが集まっているから可能なんです。おカネがなかったらやりようがない。おカネがあるから信用ができる。ワクワクしてきますね。

岡本 竹田さんは「天とワクワクありがとう」という言葉をおっしゃっていますね。人生において「ワクワク」は大切ですね。

竹田 そうです。子どもを見てください。自分がワクワクすることばかりしているので、はちきれんばかりの生の波動がある。瞬間、瞬間、いつも感動している。これが大人になると感動が減ってくる。やはり、世の中のルールやしらがみが感動の妨げになる。

ですから、まずはワクワクできる自分を好きになることから始めてみてはどうですか？ ワクワクすると心も体も元気になってくる。

岡本 私は名前が和久、音読みでは「ワク」です。

竹田 それはいい。ワクワクのワクさんだ。

岡本 竹田さんも私も名前に「和」という字が付きますね。わへい(和平)さんとわきゅう(和久)さん。やはり、和という字が名前についていると性格も平和的で調和的なことを好むようになるのかもしれないですね。

竹田 あっ、はっ、は。そうですね。

岡本 それでは最後に、インベストライフ会員へのメッセージをお願いできますか？

竹田 むしろ、自分へのメッセージでもあるのですが、恐れを排除しましょうということかな。みんなが恐れたら大恐慌になる。大恐慌はまっぴらです。ここはみんなで励まし合って、あんまり極端なことにならないようにしたいですね。ちょっと危ないところに差し掛かっているのですね。少し業績の下方修正などがあると、極端に株価が下がったりする。配当利回りが5%あっても売られる。

岡本 流動性が「過剰」から「正常」に移る過程で、極端に買われていたものの価格が調整している。それが引き金になってみんなが不安になっている感じですね。

竹田 やはり、新しい金融商品がたくさんできすぎましたね。興味もないから知らないけど。それでひとつの商品がつまずくと大きな影響が出る。

インターネットによっておカネにスピードが与えられた。それによってあたかもおカネが急に増えたような錯覚に陥った。そこでたくさんの金融商品が生まれた。おカネの額が大きくなり、人間個人の責任能力を超えてしまい、どうにもならなくなっている。これは危ない。やはり、責任能力を上げ

るためにも気概を持たないと。それに対してみんなが拍手喝采かっさいしないといけない。失敗すると、寄ってたかって、たたきのめすのではしょうがない。責任者がいなくなってしまう。

岡本 金持ち優遇とはいわないまでも、人の成功の足を引っ張るのはよくない。

竹田 格差というけれど、実感としては昭和30年代ぐらいと比べれば、今は格差がなくなっている。おカネをたくさん使える場所もなくなった。

岡本 だから旦那が減ってしまった。旦那といっても大金持ちである必要はないんです。

竹田 そうそう。旦那というのは要するにボランティアでしょう。小さい、大きいは別としてね。

岡本 個人の場合はそういう志を持った人をたくさん集めれば大きな力になる。

竹田 旦那をたくさん育てなければね。ずいぶん、手ごたえは感じています。しかし、世の中全体から見れば、まだ針の穴ぐらいのもの。私は、これから20年は貯徳時代とイメージづけているんですよ。その後の20年は徳の時代がくる。それで初めて日本が尊敬されるようになる。

文化、特に技の時代を作らないと個人が自立して共生するような形にならないから。技を磨いて、自分の技が評価されるようにならないとね。桃山時代はひとつの茶碗が一国に値することもありました。自分の作ったものがどれぐらい評価されるか、その気概を持ってモノ作りに励み、世界に評価してもらおう。インターネットでいく

らでも売れるのだから。

岡本 その通りですね。

竹田 日本の文化を作ってきた百尊のおかげで精神世界のこともわかってきた。過去も未来もバーチャルです。今、この一瞬に立っているだけですからね。それをどう、引き渡していくか。

百尊の言葉を一言で言えば、「大和心よ、美しかれ」ということです。

そして、私自身もこのメッセージを伝達する役目がある。ですから、今年で9年目ですが、私と同じ誕生日、2月4日生まれの赤ちゃんに「君よ、美しかれ」と桐の箱に書いて金メダルを贈っているんですよ。旦那はみんな自分の誕生日と同じ日に生まれた赤ちゃんに金メダルを贈ればいい。そうすれば日本は本当にジパングになれる。

その子たちは生まれたときから、「俺は知らないおじいちゃんからこれをもらった。俺は祝福されている。生きる意味がある」ということがわかる。形になってわかる。お母さんが感激して、「この子を立派に育てます」と言って誓ってくる。金の力は強いよ。これは命の力。命には延びよう、広がろう、続けよう、つながろうという性格がある。これを物質的に表しているのが金。しかも、すべての命の源である太陽と同じ色です。これはいずれ世界に向かって訴えていきたい。

岡本 太陽も、金もすごいパワーがありますよね。貯徳の思想がもっと、もっと大きく広がり、日本が世界中から尊敬される国になるようにしていかなければならない。私どものインベストライフ活

動も、「輝く一番星」になることを目指しています。日本中の個人投資家が指針にできるような考え方を提示していきたい。

そのためにわれわれなりの努力を続けていきたいと思っています。竹田さんのお話を伺い、勇気と元気そしてワクワクが湧わいてきました。今日は本当に長時間、お話をありがとうございました。

* * * *

あつと言う間の2時間であった。対談のあと、竹田さん自ら百尊家宝館を案内して下さる。日本を作り上げてきた百人の偉人が円形の大きな石膏に彫られている。それを純金のメダルにして家宝としようという運動であるとか。先人たちの営々とした努力の結果、われわれが受け継がせていただいているものを大切に、そして次の世代につないでいくには純金は最適なだろう。5ページの写真は、同館にある恵比須様の前でとった写真。「ワクワク」ですよと指を三本立ててツーショット。大きな感謝と、とても温かい気持ちで竹田本社を後にした。

そこでクラブ・インストラライフ会員の皆さんへのご提案。対談にもあった株主になっている企業の経営者を勇気づけ、励ますために手紙を書きましょう！ どんな小さな株主でも経営者がたくさんの手紙を受け取るようになれば日本が元気になります。投資信託を持っている方、投信会社の社長に手紙を書きましょう。「がんばってくれてありがとう。私たちクラブ・インストラライフ会員の志を受け止めて社会のために良いことをどんどんしてください。ありがとう、ありがとう」と。

今のマーケットにも、社会にも足りないのは「ありがとう」かもしれません。そのありがとうの波動で日本中をいっぱいにしたいものです。そんな思いを素直に、ワクワクした気持ちで竹田さんからいただきました。ありがとう、ありがとうございました。